

プロローグ——淫らな夢——

くちゅ……くちゅ……

どこからともなく、淫らな水音が聞こえてくる。

（ん……まただ）

股間に誰かの指が触れ、つうつと秘裂を撫でる。

「ふふ♡姉さんのおまんこ、ちよつと触っただけでもうぐちよぐちよだね」

（ああ……アルがまた来たんだ）

ぼうつとした頭で考える。

ずっしりと頭が重い。ピンクの霧がかっていて、うまく思考が紡げ

ない。

ぬぢ……♡ぬぢ……♡

クリを根元から勃たせるように指で溝をほじられ、裏筋をぞぞぞぞ♡とゆっくり撫でられる。

(あつ♡きもちいい♡これ好き♡)

腰がぴくぴく♡動いて、自分からお尻を持ち上げ、アルの指におまんこを擦りつけてしまう。

「ふふ。クリ、もうぷっくり♡膨らんでるね。真っ赤に熟れてえっちだなあ」

アルの指がクリをぴんっ♡と弾く。

指先が私の淫裂をむに♡と押し広げ、とろりと垂れ落ちる蜜を指ですくわれる。

「すっかり僕の指に反応するように馴けられちゃった。可愛いなあ……姉さんのおまんこはほんとに素直でいい子だ」

アルが耳元で囁く。

おまんこがとろとろで、ひくひくして。早くちんぽが欲しいって、訴えてるみたい。

「はあ……♡姉さんのえつちな匂い嗅いでたら、僕もすごいムラムラしてきちゃった……♡」

アルがズボンをずり降ろし、下半身を剥き出しにする。

「……っ♡」

（すごい……♡アルのちんぽっ♡ビキビキに血管浮いてっ♡おへそにつきそうなくらい反り返ってっ♡）

「あはっ♡姉さん、すごい発情顔♡ちんぽそんなに欲しかったんだ

？」

（欲しいっ♡アルの極長太ちんぽっ♡欲しい♡早くおまんこに挿れてっ♡奥までずぼずぼ突いてっ♡）

「いいよ♡それが姉さんの望みなら、叶えてあげる」

ぐぶうう……♡

アルが私の腰を掴み、ぱんっぱんに張り詰めた肉杭を秘裂に埋めてゆく。

（あゝ♡入っちゃった♡義弟おとうとのちんぽっ♡おまんこにお迎えしちやつたっ♡）

「ついに、ひとつになっちゃったね……♡これでもう、姉さんは俺のモノだよ♡」

（だめっ♡私達義理だけど姉弟なのにつ♡セックスなんてしちやいけ

ないのにつ♡きもち♡義弟^{おとうと}ちんぽぎもぢいよおおお♡♡

♡

「大丈夫。これは夢の中だから、何したっていいんだよ？」

アルが耳元で甘く囁く。

（そっか。それなら大丈夫だね。

アルのちんぽで、思いつき感じてもいいんだね♡）

「そう。だから姉さんも我慢しないでいいんだよ？ 思うがままに、

俺のちんぽを食って……♡」

ぬっぽ♡ぬっぽ♡ぬっぽ♡

アルのピストンに合わせて、淫らに腰をくねらせる。

おまんこは好き好き♡とちんぽに吸い付いて離れようとしない。

纏わり付く肉ビラを、熱硬い切っ先が抉ってくちやくちやくかき混

ぜる。

（ちんぽっ♡奥まで来てるっ♡すごい♡どちゅどちゅ子宮突かれてっ♡おかしくなっちゃいそうっ♡）

「はぁ……♡はぁ……♡姉さんのおまんこぎゅうぎゅう締まってきもちい……♡もうイキそうっ……♡中に、出していい？」

（アル♡アル♡出してっ♡私のおまんこにっ♡アルのせーえきっ♡どぴゅどぴゅしてっ♡）

「いいよ♡姉さんが望むままに、いくらでも出してあげる——」

第一章

「——ッ！」

水の底から引き上げられるように意識が鮮明になり、飛び起きる。

「……はあつ、はあつ、はあつ……」

荒い呼吸を繰り返し、枕元に置いていた水差しを取って水をグラスへ注ぎ、一気に飲み干す。

（また……あの夢を見てしまった）

こここのところ毎日のようにおかしい夢を見る。

おとうと
義弟のアルフレッド——普段はアルと呼んでいる——に、体をいじくり回されて犯される夢。

以前は、夢なんてほとんど見なかったのに。

(……疲れて、いるのかな)

ここ数年ほどは、働きづめでほとんど休んでいないし。

だからって、よりによつて義弟おとうととセックスしている夢を見るなんて。

もしかして、欲求不満なんだろうか？

(……やだなあ。モロに願望出ちゃってるよ)

ともかく着替えようとベッドから降りようとすると、ドアをノックする音が聞こえてきた。

「姉さん。俺だよ。今入ってもいい？」

ドアの向こうから、アルの声が聞こえてきた。

どうぞと返事すると、カチャリとドアが開いてアルの顔が覗く。

「おはよう。調子はどう？」

「昨日よりはだいぶマシかも。アルのマッサージのお陰かな」

「それなら、良かった。よく眠れるように、安眠作用のあるオイルを使っただけ」

アルが紅い目を細めてかすかに微笑む。

さっきまで見ていた淫らな夢の中のアルと重なって——つい目を逸らしてしまった。

「どうしたの？　なんか顔赤いよ？」

「……なんでもない。まだ、酔いが醒めてないのかも。昨日、会合だったし」

「姉さん、最近お酒飲みすぎじゃない？　あとお肉も控えめにしないと、血が滞るよ？」

「会食続いだっただから仕方ないでしょ。呑まないわけにはいかないし

……」

言い訳がましくボソボソ呟くと、アルの両手が私の首を撫でた。

「だーめ。ほら、首がむくんです。塩分摂りすぎ。人間の食事なんて摂るから余計体調悪化してるんじゃないの？」

「大人には付き合いつてもものがあるの」

「たまには断りなよ。いくら和平協定を結ぶからって、人間とそんなに親しくする必要ないでしょ」

アルが眉間に皺を寄せて小言を言う。

「だって……断るの申し訳ないし……」

「ほんつと……姉さんはお人好しなんだから。ほら、会議の前に軽くマッサージしてあげる。背中こつち向けて」

アルに背中を向けると、親指でぐいぐいと肩甲骨を指圧してくれる。

快い刺激に癒され、私はそつと微笑んだ。

——私がこの世界に魔王として転生して、もう何年が経つたろうか。
元々私は、ごく普通のゲーム好きのアラサーOLだった。

特にRPGを好んでプレイしていたのだが、【ライラックの誘い^{いざな}】
という18禁乙女向けRPGにハマっていた。

男性向けエロゲーでRPG作品はちよくちよく見かけるけれど、女
性向けはかなり珍しくて、興味半分で手にとってみたのだ。

プレイヤーは聖女の『リラ』となり、彼女と共に仲間達と力を合わ
せて闇堕ちした女魔王を倒すというストーリーだ。

これがかなり作り込まれていて、寝る間も惜しんでプレイし、何度

も周回プレイでやりこんだ。

そしてある日。気がつくとゲームの世界に転生していたのだ。

しかも、よりによってラスボスの女魔王として。

このゲーム、ご丁寧に敵キャラのその後まできっちり描かれるのだが、女魔王はヒロインたちに倒された後、捕らえられて地下で壮絶かつ恥辱に満ちたエロい拷問を受けたあと、処刑されてしまう。

プレイしている分にはご褒美でしかないけれど、実際に我が身に降りかかるとなると話は別だ。

幸い、私が前世の記憶を思い出したのは子供の頃だったので、時間はたつぷりあった。

私が成人して魔王となる前にどうにか手を打たなければ……

毎日そのことで頭がいっぱいだった。

アルと出逢ったのは、そんな時だった。

これから辿る自分の呪われた運命をどうしたら変えられるのかと悩んでいた私は、森の散策中にひとり考えを巡らせるのが日課となっていた。

ある日、いつものように散策をしていると、木の下で動けなくなっ
てうずくまっている彼を見つけた。

ボサボサの髪にぼろのようなマントを纏った、痩せて泥まみれの貧
相な少年——というのが第一印象だった。

(もしかして、死んでるんじゃない……)

おそろおそろ触れると、温かい。脈もある。まだ、生きている。
私は慌てて彼を抱き起こし、持っていた水筒から水を飲ませた。

「う……」

彼がゆっくりと目を開き、私を見つめる。

——血のように真っ赤な瞳。これは魔族の証だ。

そして薄汚れてくすんでいるけれど、髪の毛はまごうことなき銀色で。

（この子は……『混ざりもの』だ）

通常、魔族の髪は闇色と呼ばれる、紺か紫がかった黒。

そして、この世界の人間の髪色は、茶色や金色、赤毛が主流で。

互いの血が混じり合って初めて生まれるのが銀色の髪の子供——

『混ざりもの』と呼ばれている。

魔族と人間が一触即発のこの世界で、『混ざりもの』が歓迎されるはずもなく。

目の前の痩せた男の子がこれまでどんな迫害に遭ってきたのかは、

想像に難くない。

「……あなた、どうしたの？ ひどくぼろぼろだけれど」

「……逃げてきた」

のろのろを身を起こし、彼がぼつりと言う。

「孤児院にいたんだけど、毎日殴られるし、ご飯は食べさせてもらえないし。ここにいたら殺されるなって、思つて」

「……………」

『殺される』

彼にとつてそれは、いつ起こつてもおかしくない差し迫つた危機だつたのだろう。

そして、おそらく彼にはもう、行くところがない。

待つのは餓死か、森をうろつく獣の餌か。

「……ねえ。良かったら、うちに来ない？」

気づけばそう口にしていた。

この子を、見捨てるなんてとても出来ない。

両親をどうにか説得して、彼を迎え入れてもらおう。そう決心した。

「……いいの？　ぼく『混ざりもの』だよ？　みんな、この髪と目の色が気持ち悪いってぼくのこと追い払うのに」

「気持ち悪くなんてないよ。それに、私の目だって赤いでしょ。ね？」

そう言っただけ自分の目を指さすと、彼は初めて気がついたように目を丸くした。

「……ほんとだ。おねえさん。ぼくの仲間？」

「そう。あなたは私と同じ、魔族の仲間だよ」

「……そっか……ぼくにも仲間が、いたんだ……」

彼はほっとしたように少しだけ、微笑んだ。

「ねえ、良かったら名前を教えて？」

「……アルフレッド」

「素敵な名前ね。アルって呼んでもいい？」

「……うん」

「さ、帰ろう。アル。まずはお風呂に入って、綺麗にしないとね」

アルへ向かって手を差し伸べる。

アルはおずおずと、私の手を取った。

ぼろぼろのアルを城に連れて戻ると、両親はじめ城の人間たちは仰

天した。

が、私の必死の懇願で、どうにかアルを私の世話係として城においてもらえることになった。

アルはとても賢く、そして魔力に優れていた。

帝王学を私と共に学び、魔法の研鑽に励むうちにめきめきと頭角を現し、父上の側近たちをはるかに凌ぐ魔力を身につけた。

アルの優秀さを見込んだ父上は彼を正式に養子として迎えることになったのだ。

『この子を支えてやってくれ』

父上が余命いくばくもないと分かった時、私とアルを自分の寝室に呼び寄せ、そう言った。

魔族は人間よりもはるかに長寿だが、不老不死ではない。既に母上

は数年前に亡くなっている。

死期を悟った父上は、私が次期魔王として若干頼りないことを心配していたのだろう。

「うん。二人で力を合わせて、この国をもっと繁栄させられるように頑張るよ。ね？ 姉さん」

アルに微笑みかけられ、うなづく。

——その日から、私たちは、ふたりでひとつになった。

ふたりだから、なんでも出来る。

ふたりだから、乗り越えられる。

アルはほぼ24時間私の傍にいた。

時には政策について激論を交わし、時にはかいがいしく私の体調管理まで行う。

私が魔王の座についた時、アルは汚職に塗れていた父上の側近を更迭し、大胆な人事を断行した。

つい情に負けてしまう私のかわりに、アルが泥を被ってくれた形だ。本当は私より、アルの方が王としての資質に優れていると思う。

そう告げると、アルは「俺は、姉さんを支えたいだけだから」と笑うばかりだった。

私はアルがいなかったらとつくの昔に心が折れていたかもしれない。

そして、私はひとつの決心をした。

ゲーム本編では、アルは女魔王の腹心となり共に人間たちを滅ぼすべく暗躍した。

でもシナリオ通りに進んでしまうと、彼もまた殺されてしまう運命。

それだけは避けたい。

アルが『混ざりもの』と罵られ迫害されたのは、人間と魔族が長年
険悪な状態にあったから。

戦ってねじ伏せようとするのではなく、和平を実現すれば争いを回
避出来るし、アルのような子たちが差別されなくなるのではないかと。
そうすれば私は処刑エンドを免れるし、アルは自分の出自を後ろめ
たく思うことなく堂々と生きられる。一石二鳥だ。

アルに人間との和平を提案すると驚いていたが、『アルが混ざりも
のなんて呼ばれずに生きていける世の中にしたい』と語ると、アルは、
嬉しそうに頷いた。

「俺も協力する。ふたりで和平を実現させよう」

私たちは必死になって人間たちとの争いを回避すべく、奔走した。

諍いはもう何百年も続いていて、私の父である先代魔王の頃にはいつ戦争が勃発してもおかしくない一触即発状態だった。

人間滅ぼすべしという勢いが高まる中、私とアルは側近たちに根気よく争いによつて被る不利益や損失を説いてまわり、どうにか矛を収めさせることに成功した。

そして、国民達にも『争うより手を取り合おう』というスローガンを掲げて啓蒙し続けた。

そして、強硬姿勢をとり続けていた人間側との和平交渉に着手し、

粘り勝ちでようやく協定締結に至ったというわけだ。

「……よし、このくらいにしとこうか」

アルが背中から手を離す。

ぽかぽかと身体が温まって、すごく軽くなった気がする。

「ありがとう。アルのマッサージはほんと天下一品だね」

「ふふ、姉さんにそう言ってもらえるのが一番嬉しいな。ほら、そろそろ調印式の時間でしょ？ 着替えを出しておくから、顔洗っておいでよ」

「ありがとう、助かる」

アルがクローゼットから着替えを出してくれる。

洗面所へ向かおうとすると――

コンコン。

無遠慮なノックの音が響いた。

「……どうぞ」

僅かにドアが開き、小柄で土色の顔をした老人の、ぎよろぎよろした瞳が覗く。

「サイラスです。もうガルシア様ご一行がお見えですが」

「分かった。すぐに行く」

そう返事をする、と、「遅刻は厳禁ですぞ」とイヤミつたらしく言い残し、足音が遠ざかっていく。

私はふうつとため息をついた。

「相変わらず、サイラスは時間に細かいな」

「……姉さんにだけだと思うよ。あいつ、姉さんを舐めてるんだよ」

「あはは……私がギリギリ行動なのは事実だし」

笑って受け流そうとしたけれど、アルの表情は硬いままだ。

サイラスは父上の腹心であり、父上が床に伏せった頃にはまつりごとを彼が一手に担っていた。

サイラスは戦争推進派で、彼のおかげでかなり人間との関係がピリピリしちゃったんだけど。

さすがのアルも、重鎮であるサイラスを完全に引きずり下ろすことは出来なかった。

彼を追放してしまうと古老たちからの反発が大きくなりすぎて、争乱の火種になりかねないと判断したからだ。

なのでサイラスは未だに、権力を保ったままだ。

「……サイラスには、いつかちゃんと分からせない」と

「ん？ 何か言った？」

「なんでもない。ほら、早く顔洗ってきなよ」

アルに促され、慌てて洗面所へ向かった。

「よう、魔王殿、アルフレッド」

謁見の前へ向かうと、クセのある赤毛を後ろで一つに結んだ、甲冑姿の大柄な男が手を上げた。

日に灼けた浅黒い肌はあちこち傷だらけで、中でも左目を横断するように走る傷跡が目を引く。

「協定締結の日だというのに、ずいぶんと仰々しい格好だな、ガルシア」

「今日は一応護衛役で来ているからな、許せ。お前さんたちを警戒し

てるわけじゃない」

ガルシアはそう言つて片手で拝むような仕草をしてみせた。

ガルシアは、魔王城との境界近くにある小国——フォルトシア王国の騎士団長だ。

長きにわたる争いに終止符を打つべく、私と共に和平協定に奔走してくれた盟友のひとりだ。

彼の力なしでは、和平は成立しなかっただろう。

「分かつている。そうだ、リラは元気か？」

「ああ、超元気だよ。お前さんにも会いたがつてたぞ」

ゲームでは魔王と対立関係にあつたりうだが、転生後私が友好的な態度を示し続けたおかげで、今ではガルシアと共に良き友人となっている。

「それなら良かった。では早速だが調印式に移ろうか」

「おいおい、せっかく久しぶりに会ったのにつれないな。もうちよつと会話を愉しんでも良くないか？」

「多忙な大臣殿を待たせるのは気が引けるからな。今度ゆっくり飲みながら近況でも話そう」

「ハハ、お気遣いどうも。んじゃ、サクッと終わらせちまおうか」

「書類はもう完璧に仕上げてあるよ。ざつと確認して、調印をお願いします」

アルがすつと書類を出す。

ある魔法で保護された、複写不可能なものだ。

フォルトシア王国の大臣と互いに書類を読み合わせ、調印をつつがなく終え――

およそ数十分ほどで調印式は終了した。

「サクッと……とは言ったが、随分早く終わったな」

「グダグダ口上を述べるのを辞めたからな。虚礼廃止ってやつだ」

「お前さん、ほんとにそういう儀式めいたこと嫌うよな」

「……非効率なことが嫌いなんだ」

ほんとは前世で会社員だった時、さんざん無駄話に付き合わされたから、自分が上に立ったからには徹底的に時短を図ろうと思ったんだけど。

伝統を重んじるこの世界の人間からしたら余計不思議に映るんだろうな。

「んじゃ、さっさと退散するか。……おっと、一つ言い忘れてた。俺、リラと結婚することにしたんだ」

「……！　そうか、ついに……！　おめでとう」

「無事に和平協定も成立して、俺たちもヒマになりそうだな。式は今年中にやる予定だから、決まったら招待状を送るよ」

「ああ。盛大な祝いを用意しておこう」

「お前さんも、とつとといい男見つけて結婚しちまいな。サイラス殿がこの間城まで来たぞ？」

「……サイラスが？」

「なんでも、婿捜しをウチの国王様に頼もうとしてるみたいだぞ。お前、あんまり年寄りに心配かけるなよ」

（……どうして、サイラスが……？）

サイラスは反和平派の急先鋒で、人間を『愚鈍で脆弱なくせにプライドだけは高い、卑しい存在』と触れ回っていたというのに。

「ああ、困りますよガルシア様。魔王陛下には『サプライズ』としてお話を進めていたというのに」

「……！」

振り向くと、サイラスが、ニコニコと如才ない笑みを浮かべて背後に立っていた。

深く皺が刻まれた貧相な土色の顔に、およそ似つかわしくない愛想笑いだ。

（いつの間に……）

「これは申し訳ない。秘密裏に進めていたとはつゆ知らず」

バツが悪そうに、ガルシアが頭を掻いた。

「いえいえ。口止めしなかった私も悪うございました。というわけで陛下。今度お見合いなどいかがですか？」

「……随分急だな」

「王妃様から、良い方をご紹介いただけそうなのですよ。人間と魔族の絆をより一層深めるためにも、婚姻関係を結ぶのは悪い話ではないと思いますけどねえ」

ガルシアの腫れぼったいまぶたの下から、ずる賢そうな目が覗く。

「……………考えておく」

「サイラス様、ガルシア様たちは次のご用件があるので、そろそろ」
アルがサイラスを制するように割って入る。

サイラスは「これは失礼」と貼り付けたような笑顔を浮かべ、去って行った。

階下へ降り、アルと共にガルシア一行を見送る。

保管庫へ調印済みの書類をしまつて出てくると、アルが廊下で待つていてくれた。

「姉さん、お疲れ様」

「アルも、ご苦労だったな。だが、これで肩の荷が下りた」

アルが私の唇に指を押し当てて、上目遣いでいたずらっぽく笑う。

「もう俺と姉さんのふたりきりなんだから、『魔王モード』は解除していいんだよ？」

「あ……そうだった」

人前では『魔王』として毅然とした振る舞いを心がけているけれど、ほんとはそんな柄じゃないことは、幼い頃からずっと一緒にいたアルだけが知っている。

「姉さん、気を遣って無理しすぎじゃない？　口調まで変えることないのに」

「こういうの雰囲気が大事だから。舐められたら終わりでしょ？」

「だから肩コリが酷いんだよ。ほら、もうパンパンに張っちゃって」
アルが私の肩をぐっと掴んだ。

「あはは……バレてる」

「ほら、身体ほぐしてあげる。寝室に行こう？」

アルがぐいぐいと背中を押して、私を寝室へ向かわせた。

「姉さん、もう身体ガッチガチ。今日相当気を張ってたんじゃない？」

寝室でシュミーズ姿になり、ベッドに寝転がる。

背中や肩が剥き出しになってしまいうけれど『肌が見える格好じゃないとオイルが塗れないから』というアルの要望でこの格好をしている。

薬剤師だった母親に薬草の調合について教えてもらっていたらしく、彼特製のオイルを肌に塗り込んでからマッサージを受けると、とても体が温まってよく眠れるのだ。

「ふくらはぎもパンパン。あのヒールが高いブーツ、履くのやめなよ。腰に悪いよ？」

「そんなこと言われても……ぺたんこブーツじゃ格好がつかないでしょ」

「見た目で見栄張らないと威圧出来ないようじゃ、魔王なんか辞めた方がいいと思うけど？」

なんて毒舌を吐かれても気にならない。アルが私を心配してくれているのは、良く分かっているから。

（ほんとは、向いてないの分かっているんだよね……）

魔族という強大な力を持つ集団を束ねるには、私はあまりにも凡庸で、情に流されすぎる。

けれど、血統を何よりも重んじるこの世界において、魔王の子として生まれ落ちたからには責任を果たさなくてはならない。その一心でここまで頑張ってきた。

「姉さんは真面目で優しすぎるから、周りの期待に応えようとしすぎてじゃうんだよね。頑張るすぎるといつか潰れちゃうよ？」

「だいじょーぶ。私案外打たれ強いから」

「もう……」

ため息をつき、アルが足の裏をぐつと強く押す。

「いったあ……！」

「ほら、疲れてる。老廃物溜まつてる証拠だよ？」

容赦なくグリグリと足の裏を指圧され、私はシートにしがみついて絶叫した。

「いったたたたた……！　ちよ、ほんと、無理っ！」

「駄目。ちゃんと流さないと。だたん気持ち良くなってくるはずだから、我慢して」

アルはしばらく黙々と指圧を続けていたけれど、おずおずと口を開く。

「……ねえ、さっきガルシアが話してた、サイラスの件だけ……やっぱり、妙だよ。あいつは人間を下等生物呼ばわりしてたのに」

「……私も、何かありそうだなとは思ってる。でも、もしかしたらサイラスなりに今後の人間界との関係を良好に保とうと考えてくれているのかもしれないし……」

「……………そう、だね。姉さんは、どう思ってるの？」

「どうって？」

「だから……結婚」

「……………」

即答出来なかった。

だって私はずっと……アルのことが好きだったから。

（でも……アルは義理とはいえ弟だから……好きだなんてとても言えない）

サイラスが何を企んでいるのか分からないし、彼の思惑通りに動く

つもりもないけど。

アルへの思いを断ち切るためにも、結婚は、考えた方がいいのかもしれない。

「……前向きに、検討しよつかな」

なるべくシリアスな空気にならないように、冗談めかして答える。

「ほら、和平協定も無事締結出来たし。これからは自分の生き方についてもちやんと考えたいなって思つて」

「……………そっか」

アルは否定も肯定もせず、ひたすらにマッサージを続ける。

「……アルも、さ。もつとこれからは自由に生きてもいいんだよ？」

魔王一族の掟に縛られることなんて、ないんだから」

「……………うん」

アルが小さく頷く。

じつくりと足を揉みほぐされていると、身体がほぐれたのかふわふわしてきた。

「ふあ……きもちい……なんか、だんだん眠くなってきた」

「寝てていいよ。疲れてるでしょ？」

「ん……でもアルとゆっくり話せる貴重な機会なのに……」

耐えがたい眠気と倦怠感が、ずっしりと全身にのしかかってくる。

「大丈夫。話はいつだって出来るから……ね？ ゆっくり、休んで」

アルの優しい声が静かに遠ざかっていく。

私はとろりと、心地良い眠りに落ちていった。

ちゅ……ふちゅ……

（何……？ 身体が、熱い……）

体の内側をを、じんじんと熱が駆け巡っている。

なんだか全身が重だるい。それに、ずっと誰かに身体を舐められて
いるような……？

「ん……」

ゆつくりとまぶたを開く。

視界に入ってきたのは、ショーツ一枚にされた自分の姿と――

「あ、起きちゃった？ おはよう、姉さん」

跪いて私の足の指を舐め回している、アルの姿だった。

「……何……これ……」

「何って、姉さんの足を舐めてるんだけど？」

アルが悪びれない様子で、小首を傾げて答える。

頭が重くてうまく思考が紡げない。

これって、もしかして夢なんだろうか？

「なんで……こんなことしてるの……？」

「ん？ マッサージの続きだよ？ 姉さんの身体を隅々まで解してあげようと思って」

「……ふざけるのはよして。そんなわけないでしょ……！ 何考えてるの？」

アルがすつ……と薄目になり、冷ややかな視線を向ける。

「……………だつてさあ。姉さん、結婚するとか言い出すんだもん。俺、もう限界だよ。夢の中だけにしとこうと思ったのに……」

「ゆ……………め……………？」

ハッ、と息を呑む。

ここところ、毎晩のように見ていた、裸でアルとセックスする夢。

あれは――

「アルが……私の意識を操作していたの？」

アルがふつと口元を緩ませた。

「そうだよ。やつと気づいたの？ 結構リアルだったでしょ。夢の中の姉さん、すつごくいやらしかったな」

脳裏に、アルと絡み合う自分の姿が浮かぶ。

淫らな吐息を漏らして、バキバキにそそり勃ったアルのちんぽを挿れられて、いやらしく腰を振りたいくる私の姿が――

「俺、ずっと姉さんのこと好きだったんだよ？ 今さら他の男に渡せるわけないじゃん。だから、さ。姉さんが俺以外とセックス出来ない身体に、してあげたんだ」

「何言って——っ！」

ぼわ……っとお腹が熱を孕み、ピンク色の光を放つ。

恐る恐る視線を向けると、私の下腹部にハートを象ったような紋様が刻まれていた。

（この模様って、もしかして……）

「淫紋だよ。俺以外に発情しないようにしておいたから。他の男に触れられても、全然感じないと思うよ？」

アルは口角をつり上げて、にいつと笑った。

「……っ、こ、こんなこと、しなくなつて、私は……っ」

「……何？」

唇を噛んで俯く。

言えるわけではない。

私がアルを、弟ではなくひとりの男性として、特別な想いを抱いているなんて。

「……なんでも、ない」

「そう。だったら俺がどれだけ姉さんを好きか、わからせてあげる」
アルが私の顎をつかみ、唇を押しつける。

「……ん……っ……♡」

（何これ……キスされただけなのにつ♡身体っ♡あつついっ♡）

「ちゅ……♡んう♡はふ……んうう……♡」

歯列を割って舌を差しこまれ、ぬろお……♡と口内粘膜を舐め回される。

ちろちろと蠢く舌で頬の裏や口蓋を突かれると、背筋がぞわぞわっ♡と波打ってしまう。

（キスでこんなに感じるなんてっ♡あり得ない♡口の中がおまんこになっちゃったみたい……っ♡）

こんなこといけない。やめなくちゃ。

そう思うのに、身体が動かない。

それどころか、さらに求めるように自分から舌を絡ませてしまう。

「ちゅ……♡はふ……ん♡れろ♡れろ♡」

（だめっ♡だめっ♡これ以上深くキスしたらっ……♡戻れなくなるう♡」

「ぐんぐん♡れっ♡ぐん♡れええええぐん♡」

根元から思い切り舌に吸い付かれて、びくん♡びくん♡と身体を波打たせる。

「ふは……っ♡」

唇を離すと、つう……♡と細く透明な液体が、蜘蛛の糸のように私達を繋ぐ。

「ふふ……キスだけで軽くイっちゃったね……♡」

アルに頬を撫でられただけで、またもやぞくっ♡と甘い衝撃が走って肩が震えてしまった。

「すごい感じるでしょ？ 淫紋ってさ、性感が通常の数千倍に高まるらしいんだよね。今の姉さんはどこもかしこも性感帯ってわけだね、もつと気持ち良くしてあげる♡」

アルが私の肩を押し、ベッドへ押し倒す。

「アル……お願い……淫紋……解除してえ……♡姉弟でこんなことっ……♡ダメだよお……♡」

「どうして？ 血が繋がってないんだから別に禁忌じゃないでしょ

足の裏を舌が這いずり回る。

「っいつ♡ひいい♡足いい♡もおやああ♡」

「姉さん、雑魚すぎ♡このくらいでへばってたら、もたないよ？ どんどん上がっていくほど、感度も上がるからね♡」

れろれろ♡ れろろ♡

アルの舌がふくらはぎをたどり、膝を甘噛みして内ももへとは這いのぼる。

ぞくぞくぞくうう♡と背筋を寒気に似た愉悦が駆け巡る。

「は……っひ♡ん……はあ♡あ♡ああ……♡」

べろり♡とそけい部を舐め上げられるとびくん♡と腰が跳ね上がる。

お腹に刻まれた淫紋の放つ光が強くなり、ぼわあ♡と甘い熱がお腹

全体に広がってゆく。

(だめっ♡頭ぼーつとしてきた♡)

「姉さん、すっごいエロい顔……♡これでおまんこ触ったら、どうなっちゃうんだろうね？」

アルが私の足をぐつと大きく開かせ、顔を股間に差し入れる。

「……っ♡ア、アルっ♡だめえ……♡」

「姉さんのおまんこ、すっごいえっちな匂いがする……♡発情期のメスの匂いだ……♡」

すう、すう♡とショーツのクロツチに顔を押しつける。

アルの鼻が割れ目に当たって、それだけでもうおまんこがじゅん……♡と濡れてきてしまう。

「おまんこ、もう濡れてるね。俺に匂い嗅がれて感じちゃった？」

「ちが……♡う……はあ……♡」

「ふーん。ほんとに？」

アルが下着ごと、私のおまんこ肉を指でぷに♡ぷに♡と挟んで揺らす。

むにゅ♡と淫唇同士がくつついて、くちゅ♡くちゅ♡と粘り気のあ
るいやらしい音が響く。

（触られてるっ♡義弟におまんこっ♡むにむにつて揉まれてるう♡）
おとうと

「姉さんのおまんこ肉かうわいい♡ちよつと触っただけなのに、もう漏らしたみたいにべしよべしよに濡らしちゃってさあ。こんなよわよわおまんこじゃ、危なつかしくて他の男に会わせるなんてとても出来ないよ」

アルが指でくっ♡とスリットを押し込む。

ショーツがおまんこに食い込んで、ぐちよぐちよに濡れちゃってる♡

「アル……♡もう、やめてえ……♡こんなの、おかしいよ……♡」

「こんなにおまんこトロットロにしてるくせに、説得力ゼロなんだけど。ホントは俺に弄ってほしくて仕方ないんじゃない？」

「そんなこと……ない……♡お願い……まだ、今なら引き返せる、からあ……♡」

「引き返すつもりなんて、ないよ。姉さんのおまんこは、俺だけのモノだ」

れろお……♡

アルの舌が、ショーツ越しに割れ目をなぞる。

「おっ♡んおおおっ♡いっ♡いいいい♡おまんこっ♡

舐めるのだめええええ〜♡」

引き絞った喉から、濁った嬌声が漏れる。

きゅうううん♡とおまんこの奥が痛いくらいに縮み上がって、肉
びらのひとつひとつがウズウズしているのが分かる。

（うそおお♡きもちいっ♡こんなのっ♡知らないっ♡）

前世で、少ないながらも男性経験はあった。

けれど、こんな風を感じたことなんてない。

（私が知ってる♡クンニじゃないっ♡こんなっ♡下着越しにしろろろ
♡されただけでっ♡おまんこきゅんきゅんするなんてっ♡聞いてない
っ♡）

「すごいな、お漏らししたみたいにびっしょびしょ。シーツが濡れな
いように、吸ってあげる」

ぢゅうううううゝ♡

ショーツごと唇でスリットに吸い付かれ、おまんこ肉を吸い上げられる。

こみあげる快感の行き場をなくして、足をひたすらばたつかせるしかない。

「やああああ♡助けてっ♡こんなのっ♡つらすぎるよおお♡」

「可哀想な姉さん♡もうイキたくって仕方ないよね♡でもだーめ♡まだイカせてあげない♡いっぱいいいっぱい、悶えさせてあげる♡」

アルの舌が、クリトリスを捕らえる。

舌でれろおゝ♡と突起の溝をなぞられて、「おっ♡」とはしたない喘ぎが漏れてしまう。

れろれろ♡んれゝゝっ♡ほじっ♡ほじっ♡

舌先を尖らせ、クリの根元をほじほじ♡される。

強烈な刺激を与えられた淫芽は、みるみるうちにこりこり♡と硬く膨らみはじめた。

「はは、ショーツの上からでもくつきり♡クリの形が分かるよ？ もうぷりっぷりに勃起しちやってるね♡」

「いやああ♡見ないでっ♡見ないでえええ♡」

首を「いやいや」と横に振って拒絶の意思を示すけれど、アルは生ぬるい微笑みを浮かべるばかり。

「姉さん、さっき言ってたよね？ 俺には自由に生きてほしいって。だから俺、もう我慢しないことにしたんだ。姉さんをめちゃくちゃに犯して、俺のちんぽのことしか考えられないようにしてあげる♡それが、俺の一番したかったことだから」

ふちゅ……♡

アルの唇が突起に吸い付く。

途端にびりびりい♡と電流を流されたみたいな衝撃が、淫豆の中心に走った。

「いっ……♡ おおおおおおオオオ♡♡♡」

ショーツごとクリをしゃぶられて、唇の中でぬぢぬぢとこね回される。

ぷぢっ♡と軽く食まれて、快感の粒がぶわっ♡と下腹部に広がる。

「はっひ♡ おんっ♡らめっ♡クリ潰すのらめっ♡もおっ♡戻れなくにやるうう♡」

腰が勝手に持ち上がり、へこへこ♡と淫らに揺れる。

「そんなに腰へこつかせて♡姉さん、クリ食べられるの好きなんだね

♡もつとしてあげるね♡」

根元からぱくっ♡と啜えられて、勃起クリをぬるううう♡と引っ張られる。

「おっ♡んおお♡おっほおお♡おおくく♡引っ張るのらめえええ♡クリい♡びろびろに伸びちゃうううう♡」

「いっぱい伸ばして、ちんぽみたいにしてあげる♡」

ふるふる♡とクリを揺らされ、ぐにいいいゝと思いい切り唇で押し潰される。

「いっ♡おっ♡らめ♡いぐっ♡クリ潰されてっ♡イっぢやうう

♡」

ふぢやっ♡

溢れる淫蜜がしぶいて、びつちより濡れたショーツをより色濃く上

塗りする。

アルはぢゅうう♡とたっぷり♡蜜を含んだショーツを、美味しそうに吸い上げた。

「はあ……♡姉さんのえっちなマン汁、すっごい濃くて美味しい……♡」

アルは存分に私の愛液を啜りつくす。

「ふふ、ショーツがおまんこ汁でスケスケだね♡割れ目がくつきり見えちゃってる」

唾液と愛液でぐちよぐち♡になったショーツのクロッチを、指でつつ♡と撫でる。

「んひい……♡」

「ベトベトで気持ち悪いでしょ？ 脱がせてあげるね」

アルが私のショーツの紐に手をかけ、ぱらりと解いてしまった。

「あ……っ♡」

薄紙をはがすように、おまんこにべったり♡張りついたショーツをめくる。

解き放たれた濡れ濡れ♡のおまんこがむわあ……♡とむせかえるようなえつちな匂いを放った。

「うわ……♡すっごい濃いメスの匂いがする……♡姉さんえつちすぎ♡」

アルが私の股間に再び顔を近づけた。

充血した肉唇が、恥ずかしげにひくん♡ひくん♡と震えているのが分かる。

「アル……っ♡やだあ♡そんなに見ないでええ……♡」

足を閉じようとする、アルが私の膝に手をかけてぐつと力を込めた。

「だめ。ちゃんと見せて♡」

「やだ、やだぁ……♡」

ふるふると首を横に振り、拒絶の意思を示すけれど。

唇からこぼれるのは、甘えるような細かい声だけだ。

「クリ、ぱんっぱんに膨らんでヒクついてるね。ショーツ越しに弄っただけじゃ、物足りなかった？」

「ちが……う♡これはっ♡さつきクリイキしたばかりだからぁ……♡」

「姉さんはホントに可愛いなぁ♡あの程度の甘イキなんて、いったうちに入らないよ。だって、まだクリは皮被ったまんまじゃない♡」

「ひあ……♡」

アルがクリを指で挟んでふるふる♡と揺らす。

（これだけでもおまんこがキュンとするのに、まだ甘いってどういうこと……？）

「今までののは、ただの準備体操。ここからが本番だよ♡」

「ふえ……？」

アルが指を肉芽の両脇に当て、ぐつと力を込めて上へ引き上げた。

「うんっ!? 　んおおおおおおお　おお　おお　♡」

包皮がめくれて、ぷりんっ♡と真っ赤に充血した肉芽が飛び出す。

（あつつ♡クリを義弟おとうとに剥かれちゃったっ♡ズル向けクリになっちゃったっ♡なにこれえっちすぎるっ♡）

びくびくっ♡と腰が勝手に震えてアルの顔の前へおまんこを差し出

す。

アルが満足そうに微笑み、舌先でクリの先端をぴんっ♡と弾いた。

「おっ♡」

「これで、クリ剥き完了♡姉さんは無限にクリでイけるようになったよ♡」

ぴんっ♡ぴんっ♡

アルの舌先が敏感になった肉芽の先端を何度も弾く。

その度にばちっ♡と目の奥でピンク色の光が弾けて、腰ががくん♡と持ち上がる。

「はぁ……♡姉さんのクリ、ふっくらおつきくて、ビンビンにフル勃起して真っ赤に熟れてすっごく美味しそう……♡こんなの、食べたくなっちゃうよ」

びんびん♡に勃起したクリに、アルが唇を寄せる。

そして、ちゅうう♡と肉芽を口の中へと吸い込んだ。

「い……っ♡ ああああああゝっ♡」

（うそおっ♡ズル剥けクリトリスがつ♡アルの口の中につ♡）

「ふふ♡姉さんのクリをフェラしちゃった♡どう？ おとうと 義弟にクリちん

ぽシコシコされる気分は？」

「クリちんぽってっ♡そんなっ♡下品なことっ♡言わないでええ♡」

「だって、こんな立派なデカクリなかなか見ないよ？ ね、もしかし

て自分で毎日弄ってた？」

「ふあ……ああ……♡そんなのっ、知らにゃいっ♡」

「恥ずかしがつてるの？ 可愛いね♡大丈夫。姉さんがオナニー狂い

なところも、俺は好きだから♡」

「ほんとにつ……違うからああ……♡これはっ♡生まれつきでっ……♡」

「生まれつきおっきいの？　ますますえっちだね♡たくさん可愛がつて、もっと大きく育ててあげる♡」

逃げようとする腰を掴み、アルがクリトリスの根元を甘く食む。

ちゅ♡ぷちゅ♡れろれろお♡

熱く潤んだアルの口の中で、飴をなめるようにぷりっぷりのクリを転がされる♡

神経が集まった部分を舌でつんつん♡と突かれて、そけい部がぴーんと引きつって内ももがふるふる♡わななく。

「ひゃあああ♡やめてっ♡もおやめてええええ♡おかひくなるっ♡ほんとにつ♡クリがちゃんぽみたいになっっちゃうよおおっ♡」

「クリちゃんぽでイって、射精出来るようになろうね♡」

ちゅぽちゅぽ♡ぷぢゅ♡れろれろ♡ ね〜っ♡

アルがぱっつんぱっつん♡の肉芽をくちゅくちゅ♡と唇で揉みしだく。

舌が饒舌に蠢き、唾液まみれの淫豆を舐め転がし、つつき、ぷちつと舌で押し潰す。

自在な動きに翻弄され、腰のへこつきが止まらないッ♡

「おっほっ♡ っおっ♡おほおお♡」

「姉さんのおまんこダンス、すっごい激しいね♡自分から俺の顔におまんこ押しつけて……そんなにクリちゃんぽをしゃぶって欲しいんだ

？」

「違う♡違うっ♡身体が勝手に♡動いてっ♡止まらにゃいのおお

♡
」

へこ♡へこ♡と何かに突き動かされるように、腰を前後にせわしく揺らす。

その度にアルの唇がつぼつぼ♡と肉芽に吸い付いて、本当にクリがちんぽになっちゃったような錯覚を覚える。

「やああ♡アル♡お願い♡もおやめてっ♡いぐっ♡ほんとにつ♡クリでイっちゃうからあああああゝ♡」

「自分に素直になりなよ、姉さん♡ほんとはクリちんぽで射精したいんでしょ？」

「やだ♡やだ♡いぎだくないっ♡イったら戻れなくなるうう♡」

「いいんだよ♡女の子ちんぽでイキ狂っても♡だって淫紋のせいなんだから♡姉さんのせいじゃないんだから♡」

「でもっ♡でもおおおおっ♡♡」

ぢゅるうううう♡

アルの唇が根元から強くクリを吸引する。

あっつい口内にクリを迎え入れられて、どろっどろに蕩けてしまいう。
そう。

「らめ♡らめ♡それらめええええ♡とけりゅっ♡クリちんぽ溶けちゃうっ♡」

「あはっ♡自分で腰カクつかせてピストンしてるじゃん♡イキたくって仕方ないんだね♡いいよ♡思い切りイっちゃいな♡」

ぢゅっぽ♡ぢゅっぽ♡ぢゅっぽ♡

まるでちんぽをしゃぶってるみたいに、唇を尖らせて膨張デカクリを吸い上げる♡

「クリちゃんぽイラついて、もうアクメ寸前って感じだね♡女の子んぽで、思いつき射精キメちゃいなよ……♡」

かりっ♡

とどめとばかりに、クリの一番敏感な部分を甘く食まれる。

ぼわあっ♡と強く淫紋が光を放ち――

びりびりびりいゝゝ♡と鋭い快楽電流が背筋を駆け抜けて。

お腹に刻まれた淫紋がピンク色の強い光を放つ。

私はつま先をぴーんと伸ばして仰け反った。

「ゝいつ♡ゝおおお♡ゝえっ♡あっ♡クリフェラ♡むりいゝいゝいゝう♡いゝいゝいゝいゝいゝ♡♡♡ゝああああああゝゝ♡」
びくびくびくううう♡

全身を派手にわななかせて、私はついにクリチンポアクメをキメて

しまった。

「あ……っ♡ふう……♡はあああ……♡」

力尽き、くつたりとベッドに倒れ込む。

カエルみたいに足をばかつ♡と開いたまま、ひくひくとそけい部を引きつらせる。

シーツは私のおまんこ汁と汗でぐっちより濡れて、えっちな匂いをそこかしこにまき散らしている。

「あーあ……姉さんイっちゃったねえ……♡義弟おとうとにクリちんぽフェラチオされて、無様なオホ声張り上げて、だらしなくがに股で腰へコつかせてさあ。魔王陛下がこんな淫乱クリフェラ狂いだなんて知ったら、みんなどう思うんだろうね？」

アルが嘲けるように笑う。

侮蔑の眼差しを向けられているというのに、下半身がじんっ♡じんっ♡してしまふ。

(義弟おとうととこんなことしちゃっ♡ダメなのにつ♡負けちゃったっ♡気持ちいいのに負けちゃったっ♡私っ♡魔王失格だよお……♡)

にゅぽっ……♡

ようやく淫芽からアルの唇が離れ、イキ地獄から解放された。

これで終わった……と安堵しているはずなのに。

(どおしよお……♡身体が、あつついよおお……♡)

下腹部に刻まれた淫紋は、未だにぼわあ……♡と桃色のえつちな光を放っている。

身体の疼きは収まらない。淫らな熱は冷めるところかますます高くなる一方で。

重だるい悦痺に満たされた身体は、更なる快感を求めて小刻みに震えている。

「あ……あ……っ♡」

（おまんこっ♡直に弄って欲しいっ♡夢でしてくれたみたいにつ♡指
ずぼずぼしてっ♡ぐちゃぐちゃにかき回してっ♡イカせて欲しいっ♡）

期待に満ちた目で、アルを見つめる。

アルはふつと微笑むと、

「~~~~っ♡お……っ♡♡♡」

とんっ♡とクリトリスを叩いた。

絶頂の余韻さめやらぬところに更なる刺激を与えられ、腰がびくびくっ♡と跳ねた。

もしかしたら、まだしてもらえるのかもっ……♡

なんて胸をときめかせていたのだけれど――

「今日は、ここまでにしとくね。姉さんも疲れてるだろうし」

「え……っ。あ、あの……」

「……何？ もしかしてちんぽ、挿れてほしい？」

「……っ、あ……♡」

かあつと頬が熱くなる。もじもじして俯くと、アルは「可愛い♡」とおでこにキスをしてくれた。

「でもだーめ♡お預け♡焦らして焦らして、俺のちんぽがほしくて発狂しそうになるまで、挿れてあげない」

アルが私の顔を抱き寄せて、耳打ちする。

残酷な仕打ちをされているというのに、流し込まれる囁きはあまり

にも甘美で。

「……っ♡」

声だけでおまんこがヒクついて、溢れ出る愛液で太ももがべつとりと濡れてしまった。